



アメリカ サマー キャンプ

Watanabe
Taku

さあ！
世界の扉を開こう

2 面白いが一番『遊び心』を育てるキャンプ

大人も子どもも本来面白いことは、大好きなはずです。日常生活の中で何かに興味を持ったなら調べてみる、生活のちょっとしたことを工夫してみる、季節の移り変わりや小さな発見を喜ぶ、趣味の時間を忙しい生活の中から作り出す、スポーツをする、音楽を聴く、このような行動の原動力は、私たちの心にある『遊び心』です。しかし、仕事や勉強に追われ『遊び心』を満足するほど発揮できないのが現状でしょう。それどころか、仕事以外には興味関心のない人、自分の小さな世界に閉じこもり何事にもあまり関心を示さない人、余暇ができたなら何をしたらいいか途方にくれる人、このような人達がたくさんいます。『遊び心』のない生活は潤いに欠けるものになります。

子ども時代にいろいろな遊びやスポーツ・音楽・美術などを体験することで、面白いことを探

求する『遊び心』を育てておくことが、今後の長い人生（日本人女性の平均寿命約八四歳）をより心豊かに暮らしていくには不可欠な要素となります。

アメリカのサマーキャンプでは、『遊び心』を刺激するプログラムがたくさんあります。特に日本の子ども達にとっては、日常ではなかなか体験できないものや、逆に日本でもポピュラーなものでも導入の仕方が違い新鮮に感じられるものもあります。

キャンプでは、多彩なプログラムが用意されていて、子ども達の選択の幅が大きく興味関心を伸ばすことに全力を注いでいます。スタッフの多くは、子ども時代にサマーキャンプを体験していますし、自分が子ども時代に過ごしたキャンプのスタッフになる人もいます。つまり、子ども達と同じ体験をしてきたスタッフが指導するので、何が楽しいかよく分かっています。

一般的にキャンプのプログラムとしては、昼間は、子どもの希望でスポーツやアートプログラ



二週間の別れ・・・ (Camp Life)

ムを選択し、夕食後は、全体で行う行事やイベント的な出し物で子ども達が楽しめるものが用意されています。夜になり家が恋しくなるような暇を与えないようにプログラムされています。

子どもは、興味を持つと驚くほど集中します。そして、何かを発見したり、自分の上達を実感したときの感動は、自信へとつながります。英語ができなくてもサッカー、バスケットボール、バレーボールなど団体スポーツをしているときには意思疎通ができて楽しめます。乗馬、ヨット、カヌーなど自己の上達がよく分かるスポーツは満足度が高く子ども達には人気です。このようなアクティビティーを通して、友達もできていきます。言葉が分からず、慣れない環境で辛いと感じていた子どもでも一週間もすればキャンプが楽しくなります。

日本にいたら朝から蒸し暑くて、ぐったりしていたり、一日中冷房のきいた部屋に閉じこもっているような子が、キャンプでは朝早くから起き、自分の好きなスポーツや美術工芸に没頭することが出来ます。家には親から、学校では教師から指示や小言、干渉が多くて、それに反発することにエネルギーを費やしていた子がキャンプでは大きな枠の中でゆったりとした時間を過ごすことができます。キャンプが終わったとき、どの子も最高に充実した夏休みを送ったことを実感します。そして、親もとを離れ二週間以上外国の子ども達と生活をともにしたことが、大きな自信となります。

アメリカのサマーキャンプの目的の一つは、子ども一人ひとりの興味関心を引き出すこと、まさに『遊び心』を育てることです。もう一つは、自信と独立心を植え付けることにあります。そして、よく練られたプログラムと経験豊かなスタッフの適切な援助によってこれらが、手に入れられるように考えられています。

3 キャンプ参加適齢期・ラストチャンスは中学生

海外のサマーキャンプに子どもを参加させたいと思ったとき、いつ頃が適切な時期なのかという判断に迷われることだと思います。日本から宿泊を伴うキャンプに参加することを考えた場合、私は三つの時期があると思います。

その一、小学校中学年。ギャング・エイジとも呼ばれるこの年代は親の影響力から逃れて友達との結束を固めていく時期です。好奇心も旺盛で、時にはびつくりするようなことをやらかしたりして周囲をはらはらさせます。英語ができなくても「キャンプに行きたい」などと言い出したら、これはチャンスです。ぜひ参加を検討してください。サマーキャンプは、ホームステイプログラムなどとは違い、スポーツや遊びを通して、自立心や自己に対する自信を育てる事を目的に

しています。ですから心から楽しんで遊べる年齢のときに参加するのが好ましいのです。まさに一〇代前半の子にはびつたりです。まだ早いなどと思っているうちに中学受験などで忙しくなってしまうかもしれません。

心配な点は、長い宿泊に耐えられる体力があるかという点です。キャンプでは、楽しくて体を一杯動かしてしまいます。また、慣れない環境で精神的にも疲れます。心配な方は、子どもに家族が同伴しない五泊程度の外泊を体験させましょう。三〜四泊の外泊では、本音が出なかつたり、わがままがそのまま通ってしまったりますが、五泊以上ともなると自分の本来の姿を出さざるを得なくなります。また、わがままな子は、周囲と衝突しいろいろなことを学ぶようになります。つまり、五泊の宿泊ができれば、体力的にも精神的にもそれ以上の宿泊も大丈夫と考えられます。



マクラを持ってキャビンへ (Camp Life)

その二、小学校高学年。学校の中では、上級生として責任感や自覚が生まれてくる時期です。不正を憎み、親や教師を批判するようなことも出てきます。社会に対する関心も高まる時期です。ので、よい刺激や指導があれば視野の広い考え方も育っていきます。

小学校にも英語教育が導入されつつありますが、「まだ英語が話せなくても当たり前」と思うことができません。ですから、キャンプに入っても身振り手振りで意思を伝えることや人真似をすることが素直にできます。ところが、中学生になると「英語を習っているのにできないのは、恥ずかしい」「英語のテストの点数が悪いので、英語はできない」などと思うようになります。とくに男の子は、自尊心が高くなる年頃で、人前で恥をかきたくない、カッコ悪いことをしたくないという思いが強くなります。キャンプに興味があっても「参加する」という決断がつかないまま終わってしまいます。男の子の場合、一度自信を持つと驚くほど変わる場合があります。海外の学校への留学や国際的活動、はては就職にまで広がっていくかもしれません。逆にもう海外はこりこり、日本が一番良いと思うかもしれません。これもまた体験してみても感じたことだから良いと思います。

中学生になって、いろいろ精神的にも揺れ動く前の安定期の小学校高学年は、精神的にも体力的にも心配なく送り出せるベストの時期となります。この時期は、子どもによっては中学一年生までが当てはまる場合もあります。子どもにとって、未知の世界へ親元を離れていくことは大きな不安を伴うことで、子どもひとりでは決断することは無理です。ベストな時期だからこそ、親が積極的に参加を検討してみましょう。中学生になると、クラブ活動や受験準備などで日程的に行けない場合も出てきてしまいます。

その三、ラストチャンスは、中学生。本人が興味を持ったならば是非参加させてください。ただし、クラブの合宿や受験準備など調整しなければならぬ問題がたくさんあると思います。あれもこれもと欲張ることはできないので、この夏はサマーキャンプと割り切ることが必要になるかもしれません。私は、割り切っても決して後悔はないと思います。中学生の多感な時期に、世界中の子ども達と生活を共にした体験は大きな財産となります。

高校生年齢になると、一般のサマーキャンプより大学進学を意識した学習や単位取得が出来るキャンプ、一つのスポーツに特化したキャンプが多くなります。キャンプの期間も短いものでも四週間程度になり、日本の夏休み前から始まる日程がほとんどです。英語を母国語とする子ども達と学術的なプログラムを一緒に取るにはかなりの語学力が必要になります。そのため日本からの子ども達は、ESL（英語を第二言語とする学生用プログラム）の授業を取る方が無難です。

ところがESLの能力別クラスでは一番下のクラスを日本人が占めてしまっていることが多く、英語の上達を妨げてしまう事があります。また、スポーツのキャンプでは、テニスやゴルフをプロから直接指導を受ける事ができます。その他かなりハードなアウトドアのサバイバルキャンプなどがあります。どちらも体力があり、日本でもかなり経験のある子が本格的に学ぶために参加するのなお勧めです。

このように高校生になってからでは日程的にも長くなり費用的にもかさみます。その割に言葉の面もあり選べるプログラムが限られるため日本人同士が固まりやすく期待したほどの体験ができない事もあります。

つまり、中学生のうちの方が短い期間でもキャンプ選択の幅が広く、多彩な体験をする機会があります。サマーキャンプに参加できる最後のチャンスが中学生と言ってもいいでしょう。

もう一点、蛇足になりますが、今日、社会の変化が大きく大企業といえどもいつ倒産してもおかしくないような世の中になってきました。オーナー経営者や自営業の方は、今年なら子どもをサマーキャンプに送り出せても、一年後には金銭的に無理になるなどという事態も考えられます。つまり、多少無理をしても親が費用を出せる時期が参加時期だとも言えます。

できる時に、子どもには長期的な見通しを持った投資をするべきです。その一つが海外のサマーキャンプではないでしょうか。

9 日本から参加する子ども達

小学校の低学年から高校生まで実にいろいろな子ども達が参加する時代になりました。家族旅行や日本国内においては、体験できない数々の事を体験できる素晴らしい機会です。行かないより行った方が絶対いいのですが、参加の仕方や参加者の意識の違いにより体験の幅が大きく違ってきます。私の知っている子ども達が参加したキャンプの体験を紹介します。時間とお金をかけて参加するキャンプです、よい体験をたくさんしてきてもらいたいものです。

「いろいろなキャンプに参加した子ども達の実例」

① 語学研修

中三A君、夏休みに入ってから急に親に言われて、日本からのツアーで語学キャンプに参加し

ました。カリフォルニア州の寮に日本人の子と二人部屋で宿泊。午前中は英会話のレッスン（能力別のため日本人ばかりだったとのことです）。午後は、スポーツをしたり、シヨッピングや映画に引率されて行ったそうです。他の国の子と交流したのは、スポーツをしたときぐらいで、後は日本人の子ども達と行動していたようです。「カリフォルニアのどこへ行ったの」「参加者はどこの国から来ていたの」などと聞いても明確な答えが返ってきませんでした。日本人が多く、しかも引率者が日本人を固めて動かしていたようで、日本人以外との交流が少なかったのが残念です。

中学を卒業後、アメリカの私立学校に入学するB君は、その学校が主催するサマースクールに参加しました。学校の寮に泊まり四週間過ごしました。午前中は、能力別のESLのレッスンと午後からはスポーツを中心にしたアクティビティーや、アメリカの文化を理解するために一年間の行事（サンクス・ギビングやハロウィンなど）を実際行うプログラムなどがありました。しかし、英語で言っている事が分からず、アメリカの文化などについての事前知識もないためにあまりおもしろくなかったそうです。

そのあと一週間の見学旅行に行き、ワシントン、ニューヨーク、ボストンなどを回り、計五週

間のサマースクールは終わりました。

六月末から始まる日程や期間の長さ・費用の高さなどからも、留学を前提としたトレーニングとしてでなければ、親も子も参加に踏み切れないことでしょう。

②学校が行っている交換プログラムなど

C さんが通う私立中学校では、アメリカの学校との交流プログラムがあります。一〇日間のプログラムには、ホームステイをして学校生活を体験することが中心になっています。C さんの感想は、「英語が話せなくて苦労したけれど、みんなとてもやさしくて、楽しかった。学校の代表としていくので、ちゃんとした服装をしなさいと言われていたので、学校で遊ぶときに窮屈だった」というものでした。学校の行事として事前指導なども行き届いていますし、初めて参加する子にとって同じ学校の友達や先生が行くので心強いものです。

ただ学校主導の交流プログラムにはどうしても学校の代表という意識が出てしまいがちですし、ホームステイの家庭も厳選されています。そのため人数が限られていて、参加したい子が全員参加できるわけではないことが多いようです。

③サマーキャンプ

中三M・Mさん、学校の英語の成績優秀で、英語劇のクラブにも所属。私が毎年引率しているキャンプに自信を持って参加してきました。ところが、キャンプに入ってみると、宿泊するキャンピンはアメリカ人、フランス人のなかに日本人一人になつてしまい、初日から、「言っていることが分からない」「質問されてもどう英語で答えたらいいか分からない」と訴えてきました。「もう少しすると慣れてくるからね」と励ましましたが、真面目な子で、英語の成績もよいだけにショックが大きかったのです。

二・三日目ともなると私が声をかけると涙ぐんでしまうようになりまして。これは困ったと思っていると、そんな様子を伺

じキャンピンのフランスの子を見て、彼女を励ますようになりました。そのフランスの子自身、「三年前の初めて来たキャンプでは、英語が分からず苦労した。だから、M・Mさんの気持ちがよく分かる。私は三年連続来ているから英語もしゃべれるようになって、キャンプがとても楽しい」



トレーディング・ポスト (Camp Life)

と言って、それからずっとM・Mさんに付き添うようになりました。一週間もするとM・Mさんに少し笑顔が戻ってきました。それから、元来英語の力があつた子なので、周りの子と少しづつ会話をできるようになりました。

彼女のキャンプは二週間でしたので、やっと慣れてきたときに帰国となつてしまいました。あともう一週間あれば、もっとキャンプを楽しむことができたと思います。

中二のS・K君は、学校の英語の成績が悪く、おまけに初めて国内線の飛行機に乗ったときに揺れて怖い思いをしていました。ですからアメリカのサマーキャンプの話をお母さんがしたときもぜんぜん興味がありませんでした。しかし、S・K君の友達に興味を持った事とお母さんの強い勧めでいやいやキャンプに参加する事になりました。

私が連れていくサマーキャンプでは、四月から毎月ミーティングをして日本からの参加者全員が友達になってキャンプに入ります。しかし、このミーティングでも積極的ではなく、また、友達と一緒に参加したため他の子とも交流しませんでした。大丈夫かなと心配していましたが、サマーキャンプに入ると俄然変わってしまいました。

初日に同じキャピンの子から話し掛けられたことをきっかけに交流が始まりました。英語も得

意ではないはずなのに一人でもアメリカ、ドイツ、フランスの子とも達とサッカーをしたり、キャンプにいる犬と遊んだりしています。そのうちフランスの子とすっかり仲良しになってしまいました。

S・K君は、日本に帰国後も文通を続け、お父さん・お母さんの仕事フランスと関連があつたこともあり、ついに春休みには仕事でフランスに行く両親について行き、ホームステイまでしてきました。そして、現在はフランスにある私立の日本人高等学校へ進学して寮生活をおくっています。サマーキャンプに参加していなければ、フランスにある学校に進学しようとは思わなかったのではないかと思います。

(注) M・Mさん、S・K君の感想は、13章「キャンプに参加した子ども達の生の声」に載っています。

小学校六年生のD君が、私の引率するキャンプに参加してきました。ひよろつと背の高いD君



カウンセラーと (Activity)

は、とてもおとなしい男の子でした。たまたまD君の小学校の教師と知り合いました。その先生は、D君が参加する事を聞いて、「大変だぞ。みんなとペースが違う事をする事が多いんだ。目が離せないよ」とアドバイスしてくれました。

ところが、キャンプに入ると彼が一人で遊んでいるとアメリカの子が寄ってきて一緒に遊び出します。D君のキャビンのカウンセラーに聞いても「英語が話せないようだけど心配ない」といいます。日本の基準の中では多少はみ出てしまう事もあるD君ですが、アメリカのキャンプの中ではまったく普通の子でした。

このように日本とアメリカでは、子どもに対して要求するものが違うので、子どもに対する評価が変わるのだと思います。異なる価値観の中で暮らした体験は、自分自身や自分の普段暮らす世界を客観的に見直すきっかけになります。日本で俗に言う「良い子」だけでなく、いろいろな子がサマーキャンプに参加して、多様な価値観を体験してもらいたいものです。

10 キャンプからの発展の可能性

このようなキャンプに参加したからといって、子どもの急激な成長が望めるというものではありません。語学力にしても、英語がかなりできる子以外は、耳慣れる程度でしょう。

しかし、日常生活の中では体験できない以下のような点を挙げる事ができます。

一、二週間以上親元を離れた団体生活を体験できます。昨今は、家族旅行で、海外などにも多くの子ども達が出かけるようになりました。家族の仲が良いことは、結構な事です。親と一緒にいると子どもはつい甘えてしまいます。また、親も子どもを一人にして置けないので、シヨッピングなどにも連れていくようになります。日本人の海外での買い物好きはこのようにしてどんどん伝えられていくのではないのでしょうか。親から見れば子どもはいっ

までたつても子どもです。

四〇代になった私も母と会うと健康の事を注意されたり服装について何かと言われたりします。ましてや一〇代の子どもは、親から見れば心配ですぐ手を差し伸べたくなることでしょう。しかし、彼らは日々成長しています。自分の力で何か試してみたくて、うずうずしています。ところが、日常生活の中で常に親が先回りしてお膳立てをしまつていと依存心の強い子が育つてしまします。常に規制されていれば、無気力な子になるか、反抗的な子になるか、どちらかの可能性があります。

このような親子関係から切り離されたサマーキャンプは、一方では、子どもにとって親の保護のない不安な状態であり、他方では、伸び伸びと自分の好きな事や冒険ができる場です。日本国内や家族旅行ではなかなか設定のできない空間です。これも広い国土があり、サマーキャンプの歴史のなかで子どもの自立を手助けするプログラムがたくさん試みられてきたからでしょう。それに加えて、海外からの子ども達を長年多数受け入れてきているノウハウがあるので、どこの国の子どもも特別扱いせず受け入れることができるのです。

二、異なる価値観を知る事ができます。一例としては、日本では、感情を押さえる事の方が美

徳とされてきました。昔ほどではないにしてもこのような感覚は日本人の心の奥底にあるのではないのでしょうか。

キャンプに入ってみると、日本の子ども達の表情が乏しい事がになります。英語が堪能でないのだから身体全身を使って気持ちを表現してもらいたいと思うのですが、おとなしく人の話を聞く、面白くてもつまらなくても無表情なのです。ところが、アメリカのキャンプではこのような態度では、みんなから評価されません。友達も作りにくいのです。

日本の子ども達も悪気があってこのような態度になるのではないので、キャンプの生活に慣れると表現方法の違いに気づく子ども出てきます。また、アメリカの子ども達の輪にいと無意識に多様な表現方法を取るようになってくる子どもいます。



乗馬 (Activity)

三、外国人に慣れる事ができます。二四時間外国の子ども達と寝食を共にするわけですから目

の色、髪の色、肌の色の違いが気にならなくなり、外国の人が来ただけで、どきどきしてしまふことなどがなくなります。自然体でいられれば英語も耳から入り易くなります。

四、英語がコミュニケーションの道具だということを実感する事ができます。キャンプには、アメリカ国内はもとより、ドイツ、フランス、ロシアなどのヨーロッパの国々、カナダ、南アメリカ、アジアの国々からも子ども達がやってきました。キャンプでの共通語は英語になります。

日本の子ども達にとって英語とは、学校の勉強、受験の主要教科の一つとして学習してきました。ところが、キャンプに入ると生活をより良く、楽しくするための道具として必要になるのです。ここでは、英語を間違えても点数を引かれる事はありません。文法が多少違っていても自分の言いたい事が伝われば正解なのです。経験を重ねる事によって道具の使い方は上手になってきます。

そして、さらに道具を使いこなしたいと思うようになったときに学べば、砂漠に水を注ぐように入っていきます。コミュニケーションの道具としての英語は、インターネットなどの発達によりますます必要性を増してきています。今後、子ども達がいくつ使い慣れた道具を持っているかによって、活動の場面やチャンスが今以上に大きく左右されるようになってきます。キャンプは、子ども達に道具として英語を意識し、使う場として大変有効だといえます。

五、たくさんのプログラムを子ども自身で選択する事ができます。日常生活では、学校の時間割、習い事、塾など全てプログラムされた中にある小・中学生にとって一日の予定を決められるのは大変に新鮮な事です。

そのプログラムも乗馬、カヌー、ヨット、アドベンチャーキャンプ、工芸、絵画、彫塑、ダンス、ミュージックレッスン、野外料理など日本では体験しにくいものがたくさんあります。またサッカーやテニス、バスケットボールなど日本の学校の体育やクラブ活動で行われているものでもアプローチの仕方が違うので、今まで苦手意識を持っていた子が、そのスポーツを楽しむ事ができます。

このようにサマーキャンプのプログラムは、子どもの中に眠っている興味関心や才能を刺激するように用意されています。

六、自然の中に暮らす事ができます。多くのキャンプは自然の中にひっそりとあります。大きな建物より小さい建物が、点在しています。夜になれば必要以上に明かりをつけません。自然の中で、自分の存在がなんと無力なものか実感します。懐中電灯なしには動く事のできな生活になって、初めて日々の生活の豊かさや無駄遣いを感じる事ができます。

虫や夜の闇を怖がっていた子どもでも二週間もするとすっかり慣れてしまいます。ひ弱そうに見える子ども自身も自身が持っている生命力はたいしたものだと思います。それをスポイルしてしまう、日本の社会から一時でも離れられるのがキャンプです。

七、動物を触ることと出会うことができます。乗馬などを通して動物と接し、生きていく上で、食べることも排泄することもどちらも大切なことを知る事ができます。

都会で暮らし、ペットも飼えず、自分のうんちすらよく見ないで流してしまいうちの子が多いと思います。必要以上に汚れることを嫌う子、靴下を脱いで裸足になることを嫌がる子、糊でつけられない子などの話を聞きます。動物を触れば当然汚れます。しかし、洗えば落ちるものです。生理的に嫌われないようにしていくには、子どものうちから動物や虫と接して慣れていく必要があります。キャンプではこのようなことが日常的に体験できます。

サマーキャンプでは、このように多様な体験をすることができ、ですが、すぐに子ども達の変化につながるというものでもありません。私が引率していくキャンプでも初めての子は、生活するの無我夢中ですが、二回目・三回目ともなると日本とは違う考え方や行動を客観的に見たり、楽しんだり、批判したりする子が出てきます。このようになれば、キャンプに参加した目的の半分は達成したといっても良いでしょう。後は、日本に帰ってからもキャンプで身につけたことを実践できるかという問題になります。が、実際は難しいといえます。

しかし、キャンプで同年代の外国の子ども達と過ごした体験が、高校・大学と進学していく過程で、世界中の学校を候補に考える事ができるようになるかもしれません。S・K君のように日本人学校ではありませんが、フランスにある学校に進学した子もいます。

大人になってビジネスで海外の人と接したときに、キャンプの体験談から話題が広がる事もあ



乗馬 (Activity)

るでしょう。いくら語学ができて語るべき事がなければ会話も続きません。子どもの時期の共通体験があるとこれは強いものです。ビジネス以外の事がしゃべれる日本人は少ないと欧米人からは思われています。

現在EUは長年の夢であった戦争のない一つのヨーロッパを創る実験をしています。アメリカそのものが、世界中から人々が集まって国家を建設するという壮大な実験の場であり、いまだに試行錯誤しています。そして、ヨーロッパやアメリカでは、子ども達の交流の場をたくさん用意し、絆を太くする努力を重ねています。経済発展の著しい東南アジア各国からも欧米にどんどん子ども達を送り出しています。そこには、語学の習得以上に、多感な子ども時代の世界中の子ども達と寝食を共にして共通体験を重ねることは、相互理解に役立ち、個人の財産としてだけでなく国の財産、ひいては世界の平和にもつながるといふ認識があるからです。

ところが、日本ではどうでしょう。子ども達をキャンプに誘っても、「外国には興味がない」、「旅行するのは親と一緒にの方が楽しい」、「かったるい」、「え、二週間も出かけるの」、「行って、何をやるの」という言葉が返ってきます。知らない所に行く不安もあって出る言葉でしょうが、子ども達の本音として、苦勞するような所には行きたくない、日本が一番いい、という感覚があるのだと思います。また、子ども達の遊びが、テレビゲームなど機械を相手にしたものや少人数

ですることが多くなり、自分の気に入った友達とだけ遊ぶようになってきました。家庭も核家族が増えた結果、個室を持ち兄弟や親との接触も減ってきています。大人も子どもも他人と直に接触することを避けるようになり、日本の社会全体が内向きになっていくような気がして心配です。次の世代を担う子ども達には、多くの人と接する事を恐れないで、幅広い体験をして語るべき事をたくさん持った魅力的な人に育ててもらいたいです。

また、キャンプの意義は自分が親になったときに自分たち子どもにも同じような体験をさせたいと思ったときに分かるものではないでしょうか。ですから、決して短期的な効果を望まず、息の長いものとして考えていただきたいと思えます。このようにして、親から子へ、子から孫へと国際感覚が伝えられていったときに、経済面だけでなく、個人として尊敬される真の国際人が誕生してくるのだと思います。



アーチェリー (Activity)